令和6年度 学校経営方針

1. 校訓

真理 ・ 理想 ・ 進取

2. 教育目標（校訓に基づき策定（すべての基礎となる心身の健全さを付記））

① 真理の探究に向け、協働的に粘り強く挑戦する人の育成
② 理想を追求し、自己を高め、地域社会に貢献する人の育成
③ 進取の気象をもち、主体的、意欲的に行動する人の育成
④ 心身ともに健康、情操豊かで、他人を思いやる人の育成

3. 生徒と教職員の行動指針

① 真理の探究に向け、協働的に粘り強く挑戦する
② 理想を追求し、自己を高め、地域社会に貢献する
③ 進取の気象をもち、主体的、意欲的に行動する
④ 心身ともに健康、情操豊かで、他人を思いやる

4. 生徒と教員の目指したい人材像

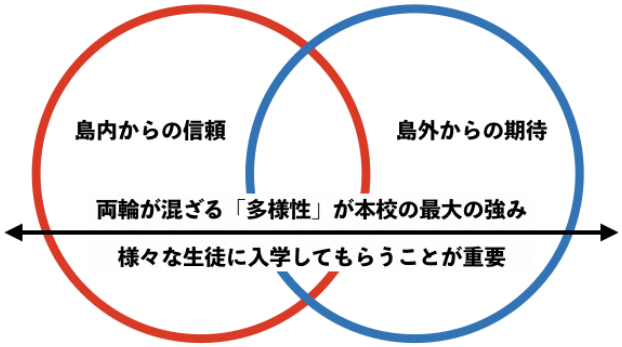
グローカル人材…グローバル･ローカルに代表される価値観の違いを超えて協働し、広い視野で考えながら身近な課題に粘り強く向き合い、新たな価値の共創に挑戦しようとする人材。
どこにいてもふるさとを思いながら、自分自身の強みや根差す地域の特性を活かして活躍できる人材。

5. 本校が置かれている現状

本校は隠岐島前地域唯一の高等学校である。高等学校が統廃合されて学びの拠点を失えば、若年層の人口流出は加速し、地域の衰退が加速することは自明である。地域にとって本校の存在意義は極めて大きく、今後も地域と高校が協働しながら「魅力的で持続可能な学校」を共創していくことが至上命題である。

本校が魅力化プロジェクトに取り組み始めてから 15 年が経ち、直近での統廃合は免れたものの課題は山積している。地域唯一の高校の魅力化を今後も継続していく本校の生命線は、2学級の維持と学修に意欲的な生徒の確保にある。そのためには、あらゆる面で下図の「島内からの信頼」に応えることと「島外からの期待」に応えることの両輪が駆動するよう教職員が協働する必要がある。両輪同士は、場合によっては価値観の違いから対立を起こす可能性も考えられ、取組には胆大心小さが求められる。

また、どちらか一方に絞ることは即ち1学級化への後退につながるため、多様性を最大限活かすことによる両輪駆動を目指すことが本校の価値を最大化することにつながると考えられる。そして、そのためには双方から多様な生徒に入学してもらうことが重要である。



6. 本校のスクール・ミッション（島根県教育委員会）

豊かな地域資源と人材の中で、地域と共に取り組む課題解決型学習等や、島外 や県外出身者など校内外の様々な人々との交流を通して、広い視野をもった、地 域や社会の未来を担うことができるグローカル人材を育成する。

7. 本校のスクール・ポリシー

（１）グラデュエーション・ポリシー

①真理の探究に向け、協働的に粘り強く挑戦する

→すぐに答えのでない課題に対しても、問いを立てながら粘り強く試行し、自他のよさや強み、つながりを活用しながら協働的に互いの資質・能力を高め合うことができる

②理想を追求し、自己を高め、地域社会に貢献する

→よりよい未来の実現に向けて理想や目標を高く持ちながら、目の前のことを大切に積み重ねていくことができる。身の回りの近い存在に対して貢献することができる

③進取の気象をもち、主体的、意欲的に行動する

→目の前に立ち現れる事象を積極的に理解しようと当事者意識を持ち、またその事象を何とかしようと現場で自らが率先して手足を動かし、泥臭く行動する

④心身ともに健康、情操豊かで、他人を思いやる

→自分自身の心身の健康状態や情緒を理解し、他者を思いやった上での感情表現や人間関係の構築ができる

（２）カリキュラム・ポリシー（学科共通）

学ぶ喜びを感じながら、主体的・協働的・探究的・社会的に学びを深める

・生徒一人一人の習熟度に応じた指導内容や授業展開

・到達目標（資質・能力等）を明示し、全ての生徒が基礎・基本の力を身に付ける

・探究と教科が往還することによって相乗効果で資質・能力を育む

・隠岐島前地域ならではの魅力や課題を教育資源として積極的に活用する

・実社会や実生活における複雑な事象を対象に、

気づく → 考える → 話し合う → 実践する(巻き込む) → 振り返る → 気づく→ …

の探究サイクルを身に付ける

・身に付けた資質・能力を自らがつなげて思考し、グローカルな場面で実践や行動に移す

（３）アドミッション・ポリシー

①真理の探究に向け、協働的に粘り強く挑戦しようとする生徒

→主体的に学習・課外活動に取り組む態度を有している多様な他者を価値ある存在として尊重することができる

②理想を追求し、自己を高め、地域社会に貢献しようする生徒

→前向きな姿勢で未来に夢や希望を持っている地域に根付く文化や伝統に関心を持ち、尊重することができる

③進取の気象をもち、主体的、意欲的に行動しようする生徒

→周囲を思いやりながら自主的に考え、自律的に判断し、誠実に実行することができる自らの人生や新しい社会を切り拓こうとする希望や意志を持っている

④心身ともに健康、情操豊かで、他人を思いやろうとする生徒

→自他の心身の健康に興味関心を持ち、他人を思いやることができる感性を豊かに働かせながら、思いや考えを基に表現することができる

8. 中期的な本校のスローガン

「<u>失敗を共に称え合う学校</u>」

これまで学校経営チームでは、第3期隠岐島前教育魅力化構想に基づき「人が変わっても進化し続ける学校」を学校経営の中心に据え、人事異動によって人が変わり続ける本校の特徴をむしろ前向きに捉え直し、推進力に変えてきた。学校経営チーム発足から4年目となるタイミングで「人が変わっても進化し続ける学校」を推進していくための中長期的なスローガンを掲げることとした。

本校の育成したい人材像や教育目標を達成するために必要なのは「正解」よりも「問い」である。なぜなら地域・社会はより複雑性を増し、先行きを見通せないからである。そういった状況下でも問いを立て、その問いを検証するために一歩前に踏み込んで行動することが重要である。先行きのわからない状況に失敗は付き物である。失敗は、とくに教育現場においてはともすればネガティブな単語と捉えられがちである。しかし、挑戦がなければ失敗は存在しない。挑戦の結果という観点から考えれば、失敗と成功は類義語とも言える。

一方で、失敗を失敗のまま終わらせるのでは意味がない。
その失敗からできる限り多くを学ぶために「振り返り」が必要となる。「振り返り」の質の高さが、物事を成し遂げる確度の
高さに直結するからである。そして、今後「振り返り」は、先行きのわからない不確実性の高い社会のあらゆる場面で必要な技術となる。

生徒だけでなく教職員も失敗を恐れることなく果敢に挑み、振り返りによって失敗さえも糧とする「踏み込みの島前」「振り返りの島前」を本校の文化、価値観に昇華させるべく『失敗を共に称え合う学校』を中期的なスローガンとする。

9. 令和6年度 学校経営目標および各分掌の重点施策等

令和4年度より、中期的な学校経営スローガン「失敗を共に称え合う学校」を中心に置き、学校経営を前に進めてきた。着実に進んできたこれまでの歩みを振り返ったとき、よりよい「授業」を届けることも、人生の糧となる「振り返り」をすることも、意志ある行動の結果「失敗」することさえも、成長を促す「踏み込み」がないと始まらないことがわかった。以上を踏まえ、学校経営目標をさらに踏み込んで設定し直し、力強く前に進む一年とするため、学校経営における昨年度までの振り返りと共に、目標並びに重点施策を次頁の一覧表のとおりとする。また、目標の達成を目指して、推進委員会を設け、主幹教諭が主管する。

10. 重点施策に係る推進委員会および各分掌長からの進捗報告および評価

年度当初に実施案とスケジュールを推進委員会および各分掌長で策定し、それに基づく進捗を運営委員会（2ヶ月に1回程度）・職員会議（適宜）で共有する。

推進委員会は、広く教職員の意見が反映されるよう振り返りや協議の場を適宜設け、次年度の学校経営目標に反映することを目指す。

令和６年度 学校経営目標および各分掌の重点施策

	経営目標	これまでの振り返りから	今年度の終了時の達成状態
学校経営目標推進委員会	**①失敗共創プロジェクト** 生徒・教職員共に「踏み込みの島前」・「振り返りの島前」を体現し「失敗を共に称え合う学校」づくりを実現する。 **「踏み込みの島前」…** 全生徒・教職員が、それぞれに、失敗可能性のあるレベルの人生にとってかけがえのない踏み込みを宣言し、踏み込みの経験を2周以上回している状態。 **「振り返りの島前」…** 生徒・教職員ともに「失敗こそが次なる挑戦の種火」であり、「2 回目の踏み込みで飛躍するための振り返り」であることを真に理解し、授業や部活動、行事や生徒指導等の様々な場面で、外部有識者の力も借りながら、技術としての「振り返り」が大切にされている状態。 生徒部特命教員 総務部特命教員 希望する教職員	様々な取り組みによって生徒・教職員・保護者間で「踏み込みの島前」「振り返りの島前」が定着したことは評価できる。 一方で、真の意味で「踏み込み」をするハードルは高く、生徒のみならず、大人でさえも自ら高いハードルを設定する難しさを痛感した。また、いくら手法を学んだとしても真の踏み込みがなければ「振り返り」はその価値を発揮することができない。 こういった状況を打破するため、今年度は挑戦ハードルの高いイベント運営そのものを生徒に委ね、教職員は「我慢しながら」伴走することに挑戦し、「失敗を共に称え合う学校」へと躍進する一年としたい。	①生徒主体で「失敗の日」を実行する。 生徒が予算管理も含めて、本校を象徴するこの学校行事を運営する。教職員は、生徒の学校行事企画・運営を伴走する。 また、これを好機に、教職員の働き方改革の観点からも、その他に生徒主体で行う学校活動の有無をあわせ検討し、年度末までに提案する。 ②「踏み込みの島前」の気運を高める。 これまで実施してきたように HP 記事の発信、失敗ラジオ、学年通信、踏み込みカードの掲示など、あらゆる情報発信機会を活用し、日常に溢れる失敗を扱うことで、失敗の価値を高め、踏み込みやすい土壌をつくる。 ③「振り返りの島前」を体現する。 振り返りの重要性について教職員・生徒で認識を統一し、本校独自の振り返りの手法やフォーマット等を教職員・生徒が活用し、振り返りに価値を実感するレベルで実行される。 【評価の観点】 ・魅力化評価「失敗してもよいという安全・安心な雰囲気がある」95%以上（前年度 91.9%） ・魅力化評価「目標や当事者意識を持って挑戦している人がいる」95%以上（前年度 94.6%） ・魅力化評価「生徒の意見が学校での意思決定に反映される雰囲気がある」90%以上（前年度 84.6%） ・魅力化評価「自分を客観的に理解することができる」80%以上（前年度 75.8%）
	②越境プロジェクト 物理的な越境を通して踏み込み、その経験を振り返ることで、踏み込み・振り返りの基盤をつくる。 ※このプロジェクトは、校種さえも越境し、中高連携を通して進める。 保健環境部特命教員 魅力化スタッフ	「踏み込みの島前」が定着し、気運が高まる一方で、この２年間では、「踏み込みの二極化」が進んだ。 「踏み込み」を自分のものとし、自走できるのは、特に「島外生徒」に多い傾向が見られた。そこには、そもそも本校へ「越境」して入学してくる「越境経験」が大きな要因として存在すると考えられる。一方で、「島内生徒」は、「越境経験」できる機会や時間が乏し	①中学2年～高校1年生の越境プログラムの参加 ローカル（他地域）、アーバン（都会）、グローバル（海外）への短期越境プログラムや地域みらい留学365、海外留学などの長期越境プログラムを企画・周知し、参加する。 ②第 3 期隠岐島前教育魅力化構想で実現しきれなかった「島内生の寮生活が当たり前になる」のトライアル 寮の受け入れ体制を整え、島内生徒が自宅か

	希望する教職員	く、一歩目の「踏み込み」までの敷居が高いと考えられる。 このプロジェクトでは、島内生徒を中心に、物理的な越境機会　の提供を通して、機会格差の解消に踏み込む。そして、近い将来、「島外生徒」「島内生徒」という括りさえなくし、全員が「踏み込みの島前高生」となる未来を実現する。	ら寮生活へと越境できる機会をつくる。 ③上記の越境機会に伴走し、越境経験後に振り返りをすることで、次への踏み込みの機会へとつなげる。 【評価の観点】 ・今年度中に、高校一年生全員が物理的な越境機会を1回以上経験する ・中学生にも越境機会を提供し、10名以上が越境機会を経験する ・島内生徒の寮生活経験のトライアルを成功させ、次年度以降、より多くの島内生が寮生活を経験できる計画を提案する
	③未来の普通科探究プロジェクト 普通科改革の取り組みを起点に、日本随一の探究・共創を実現するため、「外部人材バンク特命担当（仮）」を設置し、島外の一流人材が伴走する仕組みをつくる。 教務部特命教員 キャリア教育部特命教員 地域共創科チーム代表	本校は、昨年度より、国の普通科改革の流れに乗り、より一層の魅力化・特色化を進め、日本随一の探究・共創を実現するために学校の命運をかけた新学科（地域共創科）を設置した。 一方で、全国・世界の高校生と比較したとき、探究・共創のレベルは日本随一とは程遠く、それはつまり、生徒の可能性を最大限引き出し切れていない伴走に課題があるといえる。 新学科（地域共創科）が一周目を迎える本年度、自分たちの伴走力を高めながらも、島外の一流の伴走者を人材バンク化し、生徒の可能性を最大限引き出す一流の伴走体制を構築する。結果として、外部発表の機会で日本一の評価を得、日本随一の探究・共創を通した進路実現（出口）と島内生にとっても当たり前の選択肢（入口戦略）になる新学科（地域共創科）の理解浸透を進める一年とする。	①「外部人材バンク特命担当（仮）」を設置し、社会や学問の第一線で活躍する人材バンクをつくり、生徒の可能性を引き出す一流の伴走体制を構築する。 ②教科学習と探究学習とがより効果的に往還し、「学び」の相応効果となるよう、教科（科目）、生徒、社会等と共創した授業づくり（授業の魅力化）を推進する。 ③一年生の学科選択時には、学科の魅力が伝わり、島内生徒が当たり前に地域共創科を選択する。 【評価の観点】 ・多様な島外の大人が生徒に伴走できる体制ができ、実働する状態 ・一年生の島内生の3割が地域共創科を志望する

	分掌	令和６年度に目指す達成状態	今年度の重点施策
校務分掌	**④総務部**	①ホームページや classi 配信などにより本校の情報を適切に発信し、生徒募集に関わる広報活動をさらに充実させたり、島内の小学校や中学校などとの交流が活発に行うことなどにより、総合型選抜による県内からの入学者が増加している状態。 ②働き方改革の視点から、PTA や卒業生会、地域との連携方法が整理され、学校行事や会議の精選を進めるとともに、諸規程集や危機管理マニュアルなどの見直しを進めることにより、適切で効率的な勤務が行われている状態。 ③令和７年度に実施予定の学校創立 70 周年行事が滞りなく開催されている状態。	島内からの信頼を得るために、生徒募集に関わる広報活動をさらに充実させ、島内の小学校や中学校などとの交流の機会を設けることにより、島内からの進学率を向上させる。
	⑤教務部	①学習において困難さを抱えるなどの支援を要する生徒に対して、学年部、隠岐國学習センター、特別支援教育ＣＮ、I-Room Oki などと連携した現状把握が定期的に行われるとともに、個別の支援計画に基づいた学習支援が行われ、基礎学力の向上が数値的に認められる状態。 ②各教科・科目において授業改善が図られ、学習指導要領に定められた各教科の目標の達成と隠岐島前高校の学校教育目標に基づく伸ばしたい資質・能力の伸長、生徒学習用 PC の活用成果などが数値的に認められる状態。 ③普通科と地域共創科の学びの特色が生徒や保護者、教職員、地域住民に理解されている状態。	学習において困難さを抱えるなどの支援を要する生徒に対して関係各所と連携して個別に支援を行う。また、「学び」・「学力」に関する本校の定義を明確に定め、生徒、教員共通理解のもと、生徒個々の基礎学力の向上を図る。
	⑥保健環境部	①寮の施設管理を担保し、寮生との面談・保護者との連絡・ＨＭと調理員との連絡調整も適切かつ迅速に行われ、事務部や海士町、魅力化スタッフと連携しながら、寮生の「責任を伴う自主・自立」の気運が高まっている状態。 ②日々の健康管理・教育相談・環境整備により適切な支援が行われ、生徒が心身ともに健康な状態で学校生活を送っている状態。 ③生徒が寮やシェアハウスでの多様な仲間や島親をはじめとする地域住民の方と協働して活動する機会が整備され、自主・自立を学ぶ場としての支援体制がある状態。	生徒との対話を通じて、寮の在り方やあるべき姿、現状、運営方針等について、意思の疎通を図り、保護者や教職員、地域住民に理解と協力を求めるように努め、事務部や海士町、魅力化スタッフとの連携窓口として寮運営全体の体制を整備する。
	⑦生徒部	①人権・同和教育が推進され、きめ細やかな配慮を伴う適切な支援と計画的なアンケート実施や HR 活動、講演会等により、生徒が安心・安全な学校生活を送っている状態。 ②生徒会を中心として部活動や地域活動、学園祭などの学校行事について議論が行われ、前年踏襲ではない新しい形の活動や学校行事が企画されている状態。 ③学校の内外を問わず生徒の活動に対して適切な支援が	人権・同和教育を基盤として、生徒が安心・安全な学校生活を送ることができるように、きめ細やかな配慮を伴う適切な支援を行う。

		行われ、生徒が社会的自立のために必要なルールやマナーを身につけ、生徒や保護者、教職員、地域住民が隠岐島前地域で気持ちよく活動できている状態。	
	⑧キャリア教育部	①キャリア教育全体計画に基づいて地域共創活動を主軸とした探究学習プログラムの質の向上が図られている状態。 ②隠岐國学習センターと連携・協働した総合型選抜入試対策がキャリア教育全体計画に基づいて行われ、生徒及び保護者へ適宜情報が提供できている状態。 ③ポートフォリオ・キャリアパスポートの活用や的確な模試分析を効果的に活用し、隠岐國学習センターと連携・協働したキャリアプラン検討会を充実させることにより、生徒のキャリア形成を支援することができている状態。	キャリア教育全体計画に基づいて生徒の多様な進路志望に対応するために、総合型選抜入試への対策をさらに進める。

学年部	重点目標
1	・集団生活におけるマナーを身に付け、自他の人格を尊重しながら互いに認め合い、高め合う態度を育む。 ・教科学習及び探究学習の基盤となる基礎学力及び計画的な学習習慣を定着させることで、主体的で意欲的な学びの深化を図る。 ・生徒一人ひとりの進路希望や適性を把握しながら、適切な指導と情報提供を行い、生徒の主体的な学科選択を実現する。
2	・教科学習と探究学習や研修旅行を通じて、教科・科目の見方・考え方を活用しながら諸課題に取り組み、より主体的・協働的で深い学びを推進する。 ・体験活動を通して社会に主体的に参画するための能力や態度を育み、生徒一人ひとりの進路実現につなげる。 ・教育活動のあらゆる場面を通して情操豊かな人間性の育成に努め、人権意識の高揚を図る。
3	・自律的な行動力と他者との協働力を身に付け、自己を高め、他者を尊重する態度を育む。 ・社会との多様な関わりのなかで広い視野をもち、地域や社会に貢献しようとする意欲と実践力を育む。 ・少人数の利点を生かした個別指導を活用し、支援を個別最適化していくことで、一人ひとりの進路実現につなげる。